

2019年6月24日

『St. Paul's Librarian』第33号 正誤表

以下、訂正いたします。

お名前の誤りであり、失礼を心よりお詫び申し上げます。

誤			正	
p.25, l.12	ステファン	→		ジョン

(翻訳) デジタル時代の挑戦と機会

レコードキーピングの展望

Findlay, Cassie. "Challenges and Opportunities of the Digital Age:
A Recordkeeping Perspective"

中村 百合子 (立教大学教授)

古賀 崇 (天理大学教授)

エレン ハモンド (立教大学特任教授)

今日の短い発表では、主に三点についてお話しします。

1. 信頼できる、利用可能な記録は、毎日の仕事や生活において不可欠なものです。日常業務を行うために、責任体制を作り上げるために、もしくは過去の出来事を理解するためにも。
2. レコードキーピングの専門職—レコード・マネージャーであろうとアーキビストであろうと—は、信頼でき利用できる記録の生成と管理を支える仕組みを作りあげ、運用します。
3. 現代の社会、政治、インターネット文化は、仕事をしたり、私たちの生活を営んだりするための新しいモデル、ツール、テクニックを生み出しています。それらは新しいレコードキーピングの仕組みがいかに作用するかについてわくわくするような可能性を拓き、レコードキーピングの専門職に対して機会と挑戦の両方を提示しています。

レコードキーピングの専門職がその核となるスキルを維持するだけでなく、アーカイブズとレコードキーピングの実践を今日の現実に合わせて行く必要があることをこの講演が終わるまでに、あなたたちに伝えたいと思います。その方法で、私たちは、今もこれからも、情報の時代にあって、大変力強く、独自の、適切な役割を果たすことになります。

信頼できる、利用可能な記録は、毎日の仕事や生活において不可欠なものです。日常業務を行うために、責任体制を作り上げるために、もしくは過去の出来事を理解するためにも。

レコードキーピングは社会を前に進めるエンジンです。日々、あなたは何回くらいの取引に関与をしているかを考えてみてください。フェイスブックへのログイン、電車の切符の購入、オンラインで請求書を支払うなど。それらのいずれも、記録に頼っており、記録を生み出しています。そしてもちろん、レコードキーピングは私たちが、自身の権利を確実なものとし、権力をもつ人や組織を信頼できるようにし、過去を理解できるようにしてくれます。アーカイブを行う組織によって伝統的に果たされてきた役割です。

レコードキーピングは、過去の 20 年の間に大きな転換を経験してきました。今、私たちの仕事は、ほとんどの事例において、記録のデジタル化と管理についてとなっています。よって、自然に、記録と言って考えることも変化してきました。ファイルに収められた紙の文書というよりもむしろ、今日の記録とは、ひとまとまりのデータで、ある時点の、その文脈を明確にし、業務上の目的を果たすことを保証してくれるメタデータと一緒にしているものです。

私はグローバルなファッションの会社で働いています。私が業務上の提携先とデジタル記録について話す場合、それは巨大なデータベースに収められている顧客のプロファイルやオンライン取引記録にも及びます。これらは、わが社の成功にとって重要な記録であり、同時に、そこに含まれ得る個人情報とリスクの両方とも高いものでもあります。

これらは、過去の紙の記録のように、管理され、入手可能な状態にされ、アクセスを制限され、移動させられ、消去されなければなりません。企業のアーカイブズの一部として維持できるように、一部のものは特定されて保護されなければなりません。そのテクノロジーは変化してきていますが、業務についての信頼でき利用可能な証拠となる記録の必要性は変わっていません。

レコードキーピングの専門職—レコード・マネージャーであろうとアーキビストであろうと—は、信頼でき利用できる記録の生成と管理を支える仕組みを作りあげ、運用します。

これは単純で明白なことの表明に見えるかもしれませんが、これに何が含まれているかを一度考えてみると、すぐに、これがもっと複雑なことだとわかります。

今、私があなたたちに示した例を考えてみてください。グローバルなファッション企業が自社の顧客と、彼らのお気に入り、購入その他についてのデータを作って持っている。こうした記録の管理を検討するときに浮かびあがってくる疑問には次のようなものがあります。

- ・ マーケティングや販売の目標を達成するために、何のデータが保持されなければならないか、それがいかに使われるべきかを私たちは理解しているか？
- ・ 第三者の業者とは何のデータを共有することができるか、どのような条件のもとで共有するか？
- ・ これらの記録のどのバージョンが、アーカイブズとしての長期保管にふさわしいものとなり得るか？そして、テクノロジーが変化する中で、その形式を管理し、利用できる真正なものとしておくことができるか？
- ・ 何のデータを消去すべきか、いつするか？
- ・ 必要なときに“全体の物語”を見ることができるよう、私たちが欠損のない状態に保管しているデータセットの間の相互のつながりや関係をいかにして確実にできるか？

方法論的なアプローチを要求するような、こうした複雑な疑問が提示されました。幸運なことに、私たちの専門職は、これに対して一つのアプローチを開発してきました。それは、記録管理の国際標準 (ISO15489:2016) に記述されているようなものと、ISO テクニカル・レポートの TR 21946、「記録管理のため評価」で述べられているようなものです。

みなさんの中には、永久的な保管に向けて、いわゆる「重要な (important)」または「意義深い (significant)」記録の選定について記述するためにアーカイブズの世界で使われる、「評価選別 (appraisal)」という用語を聞いたことがある方がいらっしゃるかもしれません。今、あげましたこれらの標準では、このテクニックはオーストラリアでは広く理解されているある意味をもっていますが、たぶん世界のその他の地域ではそうではないでしょう。つまり、業務 (business)、リスク (risk)、必要条件 (requirements) を分析する方法として評価選別をとらえると、レコードキーピングについて広範囲の決定ができるということです。記録が作られなければならないという決定、もしくはそれに誰がアクセスしてよいか、そし

てアーカイブズとしての記録の管理についての決定に至るまでです。

私たちにとって、そのような決定とは、戦略的に先を見越してされなければなりません、特にデジタルの世界では。システムや必要条件が変わるたびに、レコードキーピングを分析し反復的なデザインプロセスを導入しないと、記録は多くの必要条件に合わないものになるか、まったく存在しないこととなります。

この図 (Figure 1「記録管理のための反復的な評価選別：継続的な改善のサイクル」) は、現代における評価選別において必然的に生じることを分析して示したものです。これは、新しいテクニカル・レポート[前述の TR 21946]の一部として、国際標準化機構 (ISO) での[記録管理の]評価を扱う委員会で策定されました。記録やそれらを構成しているデータやメタデータ、アクセスに関する規則、保持に関する規則、そしてシステムの持続可能性についてのこの種の分析や決定が、アーキビストを含むレコードキーピングの専門職の核となる仕事です。アーキビストは (大抵) 他の記録管理の専門職に比べ、より広い範囲で、より長い目で同じ分析や決定を行います。

評価選別活動のうち「情報収集・分析 (Information gathering and analysis)」の部分に含まれるのは、

- ・ 評価選別の範囲を見定めること (自動化されている単一の業務過程のように範囲が狭くなっていないか、もしくは、政府の権域全体に及んで行われる評価選別作業のように広い範囲にわたっているか)
- ・ 利害関係者やその他の聞き取り調査や専門的助言を求めるべき人たちの特定
- ・ 文献の情報源の発見。それには、業務上の計画、[組織内の]技術にかかわる図表、過去の監査記録、もしくはマスコミ報道が含まれるかもしれない。評価選別の範囲や焦点による。
- ・ 業務活動の分析と文書化。[業務の]階層および時系列の両方の視点からのもの
- ・ レコードキーピングの必要条件の確認。記録を作るための必要条件にはじまり、長期的に保管されるべきものとその理由についての判断まで。それらはリスクを考慮し、利害関係者に相談のうえで判断される。

「査定と実行 (Assessment and implementation)」は、レコードキーピングについて合意された記録管理の規則がいかに実行されるかについてのものです。アーカイブに収める記録の特定と保護が主たる関心であるアーキビストにとっては、用いられる方法は、保管期間や転送に関する規則のようなツールになることが多いでしょう。業務に関わっている記録管理者にとってはそれらが、業務の仕組みの中で実践可能な、アクセスや許可について規則もしくは分類体系を作りあげることかもしれません。

時間をかけて、記録の必要条件は変化します。ですので、実行されるその仕組みや過程が、業務上の、法律上の、そしてたぶん社会的な必要性にきちんと合うものであり続けるように監視されることが重要です。環境が変化するときには、新しい評価選別作業が行われるべきで、そのサイクルが再開されます。

そしてここで三つ目、最後の点です。

現代の社会、政治、インターネット文化は、仕事をしたり、私たちの生活を営んだりするための新しいモデル、ツール、テクニックを生み出しています。それらは新しいレコードキーピングの仕組みがいかに作用するかについてわくわくするような可能性を拡げ、レコードキーピングの専門職に対して機会と挑戦の両方を提示しています。

私はサンフランシスコに住んでいます。そこでは、毎日、テクノロジーの発明の急激な加速を目にします。自動運転車、キッチンのスマート・スピーカー、保険の選定についてbotとおしゃべりするなど。

そしてこのかつてない変化の早さは、レコードキーピングの専門職としての私たちに多くの挑戦を提示しています。つまり、人間がかつては行っていた仕事を機械が引き受けるようになるにつれ、それらが行う仕事についてどんな記録が残されるべきか、それらのデザインにあたり利用された規則は？情報があふれる時代にあって、私たちは、この先の何世紀にもわたって、2018年の証拠になるだろう記録をいかに特定して守ることができるでしょうか？私たちの記録管理の仕組みは、テクノロジーの変化の速度にもちこたえられるでしょうか？

しばしば、これらすべてに圧倒されるように感じます。

例えば、アメリカ合衆国で刑事司法制度に人工知能が使われようとしている方法について考えてみてください。ノースポイントという会社が開発した、コンパス (Compass) 量刑アルゴリズムが、保釈の決定、また量刑の確定、有罪か無罪かについての判決に利用されています (Liptak, 2017)。そのアルゴリズムは、人の再犯可能性を推測するいくつもの変数を使った確率的なシステムを用いて、誰が最も再び犯罪を起こすかを予測します。実は、2017年には、それが出す結論にはいくらかの偏見があることが明らかになり、特に、アフリカ・アメリカ系の被告人については犯罪を再び起こす可能性がより高く、白人の被告人については起こす可能性がより低く予測されていることが明らかになりました。レコードキーピングの専門職は、こうしたアルゴリズムがいかに動いているかについての記録を残しているでしょうか？こうしたシステムの多くは、そのコードを秘密にしておくことについて権限を所有している会社を作っています。市民が知る権利はどこにあり、いつそれらは公共の目的に使われるのでしょうか？

そうした挑戦にも関わらず、今は素晴らしい機会のある時でもあります。

- ・ ブロックチェーンが最もよく知られていますが、分散台帳技術の登場とともに、私たちはかつてない以上に、よりパワフルな方法でシステムに信用を組み込むことができます。オンラインでお互いを欺く方法がたくさんある中、これは改変ができない記録を作って保管することを求める仕組みです。
- ・ 「モノ」としてではなく、データのまとまりとして記録について考えることによって、私たちは、物理的な記録のみを扱っていたときには難しかったか不可能だった、それらを共有して再利用する新しい方法を思いつくことができるようになっていきます。
- ・ 私たちは、生み出される時から記録が特定され守られるべく、システムの中に記録保存をコントロールする仕組みを作りあげることができます。
- ・ 機械学習の実験は、アーカイブズの記録へのアクセス許可の調査や裁判開始前の弁護士同士の書類交換などの過程をより早く進める可能性を示しています。

おわりに

全体的に見れば、現在のやり方は確かに挑戦を受けて立っていると主張できるでしょう。[前述のように]評価選別作業を反復して行うという前向きな戦略はもっともはっきりとした例ですが、まだ対応しなければならない領域があります。

私たちはより高いレベルで仕事をしなければなりません。個々の記録についてではなく、

業務活動とその制度、利害関係者とリスクについて考えなければなりません。

私たちはリスクマネジメントをして、時間と専門的な能力をふさわしくちゃんと使わなければなりません。次のような独自の貢献ができるように、力を注がなければなりません。

- ・ 変化する業務、その担い手、システム、必要条件、利害関係者を理解し、記録を作成し、最新にしていくこと。
- ・ 時と共に変化が起きます。にもかかわらず、その知識を使って、記録と機関・機能・義務の間に、意味のある、機械が実行可能な関係を作り出して維持することが不可欠です。この関係が記録に意味をもたらす最も重要な文脈です。それは固定された不動のものではなく、記録との関係、周りの記録との関係と合わせて常に変化しています。私たちはこの変化を記録していかなければなりません。

ここが、私たちが価値をもたらすことができる場所です。つまり、国立公文書館のイギリスのデジタル関係の責任者であるステファン・シェリダンが最近、言ったように、文脈（context）が私たちの“archival superpower”（アーカイブすることがもつ大きな力）なのです。

ビッグデータ、個人のプライバシーの限界の移動、機械学習、そして[ネットワークの接続がそれを利用する人の数を上回る]ハイパーコネクティビティの時代にあって、レコードキーピングの専門職はなくてはならない存在になり得ます。しかし、私たちは、この新しい世界で生き残り、繁栄したいなら、対応し、優先順位をつけ、焦点化しなければなりません。私たちは「事実の後」の記録の受身の受け手ではられません。レコードキーピングが証拠、信頼性、利用可能性についての変化するニーズに見合う記録を生み出していこうと推測することはできません。私たちは記録の保護者であると同時に、業務を可能にする者ですが、私たちの多くは今、「モノ」を管理するという考え方から、業務の過程、システム、データを理解してそれを使って働き、記録を、そして将来のアーカイブズをデザインするというふうに考え方を変えなければなりません。

(参考文献等は原文末尾を参照)